

土木遺産を核とした野外博物館化による街づくりに関する研究

山尾 敏孝¹・柿本 竜治²・伊東 龍一³・三澤 純⁴・水上 仁⁵

¹研究代表者 熊本大学工学部環境システム工学科教授

²学内共同研究者 熊本大学政策創造研究センター助教授

³学内共同研究者 熊本大学工学部環境システム工学科助教授

⁴学内共同研究者 熊本大学文学部助教授

⁵学外共同研究者 熊本県美里町教育委員会

本研究では、熊本県下益城郡美里町において歴史的に価値のある文化遺産である石橋や用水路などの土木遺産、寺社や町並みの建築物及び景観地を対象に、現地調査及び既存の資料を参考にして調べた。現地調査では美里町の文化遺産の分布や現状について把握した。調査の結果、美里町は、1)生活用水として活用されている用水路が多い釈迦院川を中心とした地区、2)古い町並みと素晴らしい景観地を有する津留川を中心とした地区、及び3)棚田が保存されている小崎地区が、文化遺産として優れた地区であることが確認できた。これらを野外博物館化することにより、まちづくりとして展示・利用可能で博物館の要素として適しているかどうかの評価・検討を行った。また、まちづくりに活用するための、これらの文化遺産を整備・改修する場合の問題点も把握した。

1. はじめに

近年、社会情勢の変化に伴い、我々の身の回りの歴史的建造物以外にも様々の構造物が文化財として登録が可能になり、文化財を活用しながら保存することが出来るようになった。明治以降に建造された近代化に貢献した各種の橋梁、トンネルなどの道路、鉄道施設や港湾施設、河川構造物や農業土木構造物、発電施設、上下水道施設などの土木遺産¹⁾や住宅(写真-1)、事務所、学校などの公共建築物や社寺等の建築物²⁾(写真-2)、あるいは産業遺構などである。しかし、保存や活用等の観点からみると甚だ淋しい状況で、社会の生活基盤を支えてきたこれらの貴重な土木構造物や建築物についてはその大部分がただ淡々と使用されており、社会的な要望や構造的な寿命により、改築や大幅な改修を受け、あるいは全く使用されておらず放置されたままの状態のものも多数あると思われる。こうした状況の中、一昨年に文化財保護法が改正され、景観地も文化財保護の対象にできるようになった³⁾。これにより、文化的景観として風土に根ざして営まれ、人々の生活の中で関わってきた



写真-1 旧砥用町の蔵



写真-2 善通寺本堂



写真-3 美里町の風景



写真-4 コンクリート補強の石橋

景観地(写真-3)、自然と共生する中で育んできた素晴らしい原風景や棚田、段々畑などの保存・活用が可能になった。一方、美里町には歴史的な種々の構造物や町並み、景観地が残り、有形・無形を問わず数多くの伝統的な文化財、つまり文化遺産のある豊かな町である。日々の生活の中で文化遺産を活用し、身近で大切な、伝えていきたいモノやコトである文化遺産に触れ合える空間がたくさんある特徴ある町であるが、文化財保護と保存・活用については十分とはいえない状況である。

本研究は、周囲を山で囲まれ、田と川の広がる自然豊かな町である美里町を対象に、文化遺産を野外博物館の構成要素として用いたまちづくりを提案するものである。そのためには、歴史的な建築物や土木遺産、その他の構造物を中心に、新たに景観地を取り込み、文化遺産として十分価値があると考えられる文化財の現状調査が必要となる。これらの結果を基に、文化遺産を野外博物館化として利用し、必要な整備や補修等を含めて、街づくりを計画・提案することが最終的な目標である。

2. 野外博物館化と文化遺産の現状

「野外博物館化」とは、土木遺産等の活用できる文化財つまり文化遺産を野外展示物として整備することにより、歴史と自然、人が共生する文化のある街づくりを目指すものである。野外博物館の構成要素を野外展示物として整備するには、まずその対象物が現在どういう状態になっているかを調査することが必要である。現状では実際の生活上の利便性から土木構造物等は様々な方法により文化財として扱われていないものが多い。例えば、修復できないようなコンクリートで上から埋められた石橋(写真-4)、壊されたり持ちさられた石碑などがある。また、現在利用されて



写真-5 用水路の記念石碑

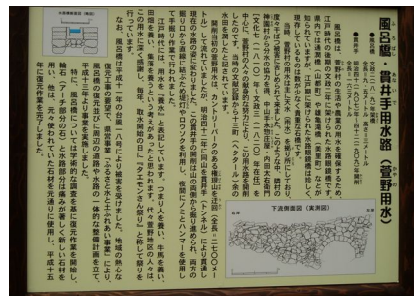


写真-6 石橋の説明板の例

いる石橋や、民家の横を流れる用水路、田や民家にある石垣などは細かな未整備・未改修である場合が多い。また、石橋の紹介看板などは、無いところの方が多いが、あっても道の端に小さな看板が設置されている例や、こういった意図で造られたかという説明の看板がない石碑もある(写真-5)。紹介板を置くにも、わかりやすさの工夫や設置方法も問題となる。一方、町内への来訪者に文化遺産を何でも紹介すればよい訳ではない。貴重な文化財の保存方法が十分でないで紹介板の設置で、文化遺産そのものを傷つけてしまう危険性もある。適材適所の整備・改修が必要であるとともに、行政と住民とが十分話し合い、最も適した処置を取ることが大切である。

写真-6 は、美里町の北西にある風呂橋という水路橋の説明看板である。町のカントリパークの近くにあるということもあり、整備・改修状況や石橋の歴史が紹介されており、訪れる人にとって勉強の場として役に立つようになっている。具体的な策を用いることで街を再発見できるきっかけになるはずである。野外博物館化は現在使用されている種々の文化財を中心に、野外で利用する博物館として活用することに大きな意義がある。

3．美里町の文化遺産の調査結果

美里町は図-1 に示すように旧中央町(西)と旧砥用町(東)が合併してできた新しい町であるが、文化財保護の対象になる歴史的な遺構や構造物あるいは景観地が多数あり、かつ無形の文化財も数多くある。最近では地域住民が中心となって、古い町並みや歴史的な橋梁等の文化財について、その魅力、意義や価値について十分理解し、街づくりの資産としての活用する機運もある。このような環境や地域の状況から、文化遺産の野外博物館化を通して価値を再発見・再評価し、最終的には地域に身近なもの・大切にしたいもの・受け継いでいきたいものを伝承し、住む人と訪れる人にとって魅力的な町にするための一方法になればと考えている。美里町には全体を通して文化財が多数存在するが、本研究では野外に展示可能な有形の文化財に焦点を絞って調査を行った。調査で得られた美里町の文化遺産の分布状況を図-1 にまとめて示す。

美里町の中央部分と北西部分には昔ながらの町並み、民家や寺社が集中して存在する。また、中央部分の盆地から見下ろす風景・景観は非常に素晴らしく、道路のまわりを囲む林や田は自然と人の共生した空間として活用されている。旧砥用町には

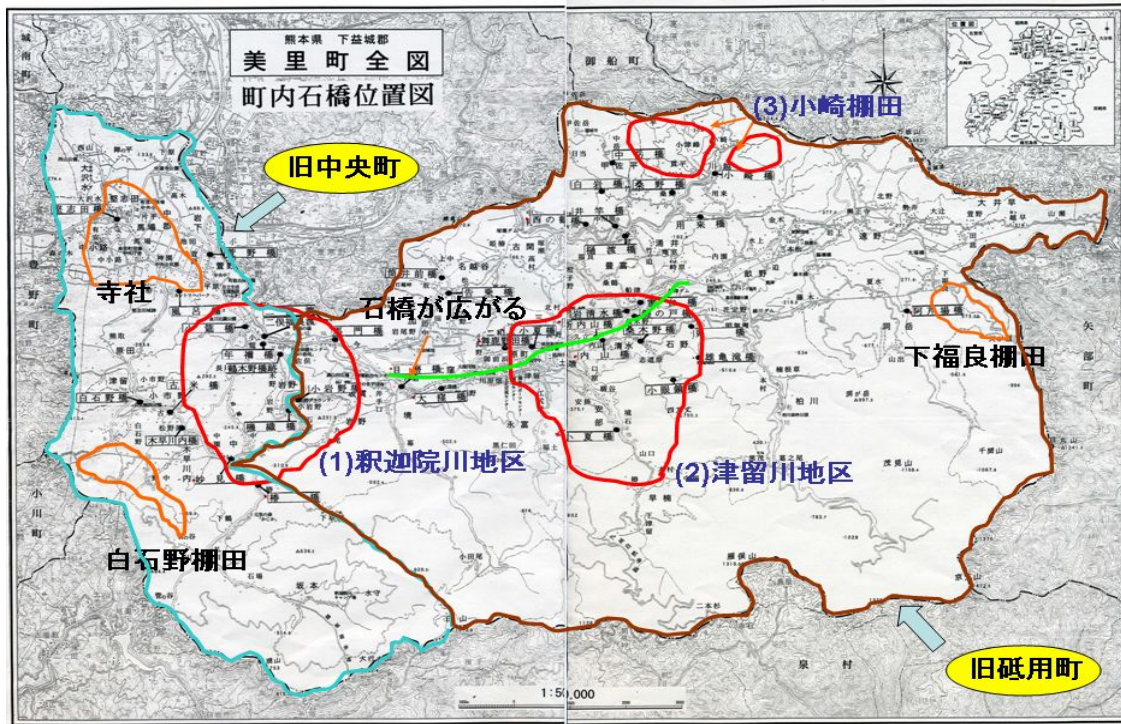


図-1 調査対象地区の位置

歴史的な町並みが多く、風景としても見事である。更に、美里町の魅力として、300年以上前に用水路が造られてから、その後各地域に建設・活用されてきた用水路があり、町全体に張り巡らされていることが上げられる。表-1と表-2は旧中央町及び旧砥用町に存在する用水路の一覧で、大半は江戸時代後期に造られていることがわかる。用水路が旧中央町の全体に広がっており、1800年代前半に活発に旧中央町全体に用水路が広まったと考えられる。台地の田畑を開墾をし、飲料水にも利用するため河川から限られた水を取り入れ、このような多くの用水路が造られたと思われる。旧砥用町は用水路の数は少ないが、河川や用水路の規模が旧中央町より大きいようである。この地域の行政は図-3に示すように砥用手永と中山手永に分けられ、表-3にそれぞれの時期の惣庄屋を示しているが、用水路を建設・指導したのが惣庄屋であり、彼らの活躍により用水路が建設されてきたことが容易に判る。また、美里町中央町地区の金石文遺物調査⁴⁾⁵⁾によれば、美里町には石碑やその他の碑文が様々な場所に分布しており、用水路開削の記念碑である。石碑から建設された用水路の石工も判明し、歴史を知る手がかりが得られている。町の碑文は約700もあるが、表-4はその中でも寺社や記念碑などの歴史的な碑文を掲載したもので、石碑の他に板碑も多いことが明らかになった。

調査より美里町の特徴として、西部に(1)釈迦院川を中心とした地区は非常に用水路の数が多く、生活用水として活用されている場所、(2)津留川を中心とした地区は古くから伝わる町並みが印象的で、盆地から見下ろす景観地が優れている場所、(3)南西、東、北に散らばる棚田地区は田や民家の土台に使われる棚田が優れている場所が顕著である。そこで自然と文化遺産の共生する町並みや優れた景観地及び用水路が多く残るこの3箇所の現状把握や特徴についての詳細調査を試みた。

表-1 旧中央町用水路一覧⁶⁾

用水名	通年年代	惣庄屋	資料名	受益面積 当初・現況	補 足
大沢水用水	1806 年	内田太右衛門	町在	2 町 3 反余・不明	矢嶋忠左衛門が後に堀削
井手仲間用水	1812 年	内田太右衛門	町在	2 町余・3ha	
胞衣川用水	1814 年	内田太右衛門	町在	4 町 6 反・不明	
弘川用水	1815 年	内田太右衛門	町在	2 町 2 反余・不明	用水 1500 間
椿用水	1818 年	内田太右衛門	町在	7 町 5 反・0.8ha	用水 132 間
小筵用水	1819 年	内田太右衛門	町在	4 町 5 反・5ha	堤懸 290 間、浦山・前田両堤掛り
萱野用水	1819 年	内田太右衛門	町在 貫井手竣工記念碑	13 町余・17ha	山ノ坊・萱野露両堤掛り、1503 間 明治 42 年貫井手掘り通し
ムカイゴ用水	1824 年	小山喜十郎	町在	不明・8ha	
木早川内井手	1830 ~ 1839 年	小山喜十郎	——	不明・0.5ha	貫井手あり
六ノ島用水	1830 ~ 1839 年	小山喜十郎	町在	2 町 5 反・1ha	
古米用水	1842 ~ 1854 年	矢嶋忠左衛門	町在	不明	
中村用水	1842 ~ 1854 年	矢嶋忠左衛門	——	2 町 2 反・1.6ha	
岩野用水	1845 年	矢嶋忠左衛門	磨崖碑文 用水記念碑	16 町余・不明	火薬を使った手法が注目
岩野用水懸井手	1845 年	矢嶋忠左衛門	——	不明	岩野用水取水の川水増し用の井手
馬場新堤井手	1865 ~ 1867 年	藤井五郎助	町在	不明・20ha	
白石野用水	1865 ~ 1867 年	藤井五郎助	——	不明	堤懸井手
白石野上井手	1865 ~ 1867 年	藤井五郎助	——	不明・7ha	
岩下新井手	1859 年	不明	宝泉(竣工 板碑)	不明	生活用水併防災用(火災)として開削
モタル川用水	不明	不明	町在	10 町 2 反余・不明	文化 14 年内田太右衛門井手竣工、 373 間
馬場古堤井手	不明	不明		不明・15ha	
宝勝寺用水	不明	不明		不明・7ha	
白石野中井手	不明	不明		不明	
白石野下井手	不明	不明		不明	
馬場恵下迫堤井手	不明	内田太右衛門	町在	3 町余・3ha	
中郡古道堤井手	不明	内田太右衛門	町在	15 町余・10ha	現在は堤自体で造り替えて拡大山口堤としては 10ha 田水懸になっている。碑建立は明治 31 年
佐俣用水	1683 年	中山孫左衛門	磨崖碑文	6 町余・7ha	文化 12 ~ 文政 2 年まで内田太右衛門手入れ開明等にて田面積 7 町 2 反に増、1230 間。碑文から石工も判明しており(太八・利八)、碑文の内容は消えている部分以外は判明している。歴史的に価値の高い用水路である。

表-2 旧砥用町用水路一覧⁷⁾

用水名	通水年代	施 工	資 料	受益面積 当初・現況	特 徴
早楠井手	1689 年	篠原惟晴	上井手大改修 記念碑	不明・約 30ha	延長約 4 km。二和田・安部・上土喰の一部に給水
柏川井手	1820 年	三隅丈八	自分手控	33 町歩・約 70ha	延長約 11 km。総費用 60 貫。延作業人数 60,268 人。工期 6 ヶ年
夏水井手	1826 年	不明	夏水井手百年 記念碑	不明・約 30ha	延長約 2.5 km。山出・夏水・藤木に給水
下福良井手	1837 年	三隅喜兵衛	下福良井手 記念碑	不明・不明	延長約 1.5 km
坂貫新井手	1683 年	中山孫左衛門	磨崖碑文	6 町余・約 7ha	長約 3 km。通称「佐俣用水」
今村井手	不明	不明	風冷水路之碑	不明・約 6ha	

表-3 砥用・中山手永の惣庄屋一覧⁸⁾

	砥用(旧砥用町)	中山(旧中央町)
正保 1(1644)	砥用善兵衛	中山理左衛門
寛文 4(1664)	砥用善兵衛	中山甚左衛門
延宝 3(1675)	砥用善兵衛	中山孫左衛門
貞享 1(1684)	砥用善兵衛	中山孫左衛門
元禄 5(1702)	砥用善兵衛	中山孫左衛門
宝暦 8(1758)	砥用和右衛門	篠原善兵衛
寛政 7(1795)	砥用常右衛門	成松市左衛門
文化 1(1804)	米村八助	成松市左衛門
天保 1(1830)	小田唯次	小山喜十郎
天保 0(1839)	宇野源兵衛	小山喜十郎
天保 13(1842)	宇野源兵衛	矢嶋忠左衛門
嘉永 1(1848)	篠原善兵衛	矢嶋忠左衛門
安政 1(1854)	右田徳左衛門	矢嶋忠左衛門
文久 1(1861)	梅田源作	不明
慶応 1(1865)	藤井五郎助	福島太郎右衛門
明治 1(1868)	藤井五郎助	福島太郎右衛門
明治 3(1870)	藤井淳之助	福島太郎右衛門

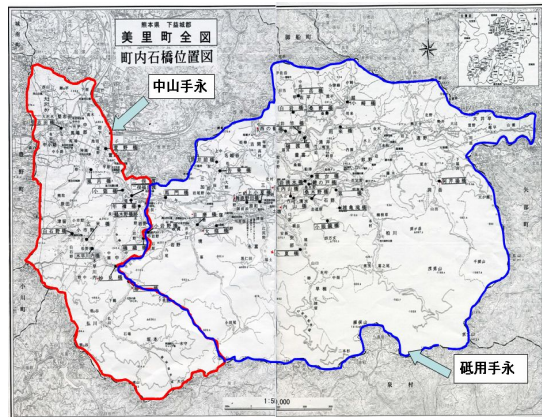


図-2 中山手永・砥用手永の位置関係

表-4 美里町(石)碑文一覧^{4), 5)}

文化財名	形式	所在地	建設年・紀年名	特徴
大将どんの墓	板碑	中小路	明治 12 年 5 月	
大沢水六地藏	六地藏	大沢水	大永 8 年 11 月 19 日	かつて「薩摩街道」に存在したが、1940 年頃に現位置に移動した
六地藏	六地藏	西山正法寺	不明	ガン部のみ地輪、火輪がピンク石、空几輪は凝灰岩
釈迦三尊板碑	板碑	西山正法寺	享禄 5 年 3 月 20 日	拓本有り
三界萬霊智板碑	墓碑	西山正法寺	元禄 17 年 4 月 8 日	
隈部兵庫助板碑	板碑	馬場	慶長 12 年 3 月 9 日	
梅林神社梵字板碑	板碑	中郡(梅林社)	享禄 4 年 5 月吉日	笠付板碑
梅林神社梵字板碑	板碑	中郡(梅林社)	天文 21 年	
正乗寺板碑	板碑	菅野正乗寺境内、普光寺跡	永禄 3 年 3 月 13 日	笠石欠損
不動明王板碑	板碑	中小路	中世か?	円心坊と呼ばれ山中の削平地に存
板碑 卍	板碑	下中郡高木	天文 2 年 4 月吉日	
板碑	板碑	白石野阿弥陀堂境内	永正 12 年 8 月	拓本有り 笠石欠損
阿弥陀三尊板碑	板碑	白石野阿弥陀堂境内	不明	拓本有り 笠石有り
長野加賀守逆修板碑	五輪塔	白石野阿弥陀堂境内	永禄 5 年 10 月吉日	拓本有り 笠石有り 逆修碑
阿弥陀三尊板碑	板碑	白石野 栗山	不明	拓本有り 三尊板碑
長野加賀守供養墓	墓碑	白石野 栗山	明治 3 年 11 月	拓本有、惣庄屋は福島太郎右衛門
梵字板碑	石仏	小市野公民館前	不明	キリークあり
十三仏板碑	板碑	小市野公民館前	天文 4 年 10 月吉日	一石五輪塔
六地藏	六地藏	小市野公民館前	明応 3 年 11 月 12 日	拓本有り
阿弥陀三尊板碑	板碑	小市野公民館前	永正 7 年 11 月 15 日	拓本有り
板碑	板碑	大沢水トクボトケ	不明	拓本有り 裏面に加工跡複数あり 字元では寺跡と言われている
出目墓地墓石	墓碑	馬場出目	天正 8 年 2 月 3 日	拓本有り
板碑	板碑	馬場出目	寛永 6 年 9 月 28 日	笠なし 拓本有り
小岩野用水竣工碑	記念碑	小岩野(天神原)	天保 9 年	拓本有り、惣庄屋は小山喜十郎
墓石	墓碑	中墓地	元禄 13 年	朱有り
阿弥陀一存種子板碑	板碑	中墓地	不明	拓本有り
九曜紋磨崖刻印	磨崖碑	石原・中の境	弘化 2 年 11 月	惣庄屋は矢嶋忠左衛門
板碑残欠	板碑	小市野公民館前	不明	拓本有り 阿弥陀堂下旧道沿い
墓石(真如堂境内)	墓碑	白石野	享保 11 年 2 月 10 日	拓本有り
板碑(真如堂境内)	板碑	白石野	不明	拓本有り
弘川六地藏	六地藏	弘川	文明 14 年	一面六体の六地藏 拓本有り
一石五輪塔	五輪塔	馬場	不明	空風輪欠損 建石のすぐ隣
清正公さん板碑	板碑	中園	万延 2 年正月 11 日	清正公脇に所在
佐俣用水開削磨崖碑文	磨崖碑	佐俣	天和 3 年	惣庄屋は矢嶋忠左衛門

4. 三地区の特徴と主な文化遺産

美里町三地区の主な文化遺産の一覧を表-5 にまとめた。釈迦院川を中心とする地区は石橋や用水路の他にも碑文や寺社の数も多く、選定した三地区の中で最も文化遺産の多い地区となっている。この地区の文化遺産はほとんどが江戸時代後期に造られており、200 年ほど前から発達した地区であると言える。次に、津留川を中心とする地区は景観地が優れており、寺社や江戸後期から伝わる民家や商店も多い。盆地から見下ろす景観地がこの地区の大部分を占めている。最後に棚田地区は室町時代から活用されており、石橋やその他の文化遺産は少ないが、棚田を含んだ歴史的な棚田が印象的である。棚田や周囲の民家には石垣が使われている。

表-5 美里町三地区の主な文化遺産一覧⁹⁾⁻¹²⁾

文化財名	所在地	建設年	形状	諸元・特徴	資料名
釈迦院川地区					
二俣小簀橋	中央町小簀	1828 年	石造ア - チ	全長 28.00m、幅員 3.30m、高さ 8.00m 町指定文化財	現地調査
二俣福良渡	中央町小簀	1828 年	石造ア - チ	全長 27.00m、幅員 2.50m、高さ 8.00m 町指定文化財	現地調査
年称橋	中央町年称	1923 年	石造アーチ	全長 40m 位 縦柵式の高欄 建設当時の姿を保つ	中央町史
小岩野橋	中央町小岩野	不明	石造ア - チ	全長 12.00m、幅 1.60m、高さ 4.00m	(3)
木早川内橋	中央町松ノ原、木早川内	1921 年	石造ア - チ	全長 10.00m 幅 3.00m 生活路として利用されている	(3)
白石野橋	中央町大字白石野	大正時代	石造ア - チ	全長 11.00m 幅 1.80m 拡幅・補強・舗装され車が通行	現地調査
坂貫新井手	中央町佐俣	1849 年	磨崖碑文		磨崖碑文
岩野用水	中央町岩野	1846 年	磨崖碑文 用水記念碑	16 町余	現地調査
馬門橋	中央町佐俣	1828 年	石造アーチ		現地調査
妙見橋	中央町大字中字鶴場	不明	石造ア - チ	全長 23.40m、幅 4.00m	現地調査
椿橋	中央町大字椿	不明	石造ア - チ	全長 12m 幅 1.6m 改修で橋の両面・下面にコンクリートで補強 / 石組無	現地調査
佐俣阿蘇神社	中央町佐俣	(1)	寺社	寛文 10 年棟札あり	近世社寺
熊野座神社	中央町中郡	(1)	寺社		神社誌
猿田彦神社	中央町佐俣	(1)	寺社		神社誌
吉見神社	中央町小簀	(1)	寺社		神社誌
岩野菅原神社	中央町岩野	(1)	寺社		神社誌
阿蘇神社	中央町佐俣	(1)	寺社		神社誌
神の木大神宮	中央町白石野	(1)	寺社		神社誌
上の木神社	中央町白石野	(1)	寺社		神社誌
菅原神社	木原河内	(1)	寺社		神社誌
松の原城	中央町松ノ原	(1)	城跡		神社誌
白石野用水	中央町白石野	不明	ため池	堤懸井出	(4)
白石野上井出	中央町白石野	不明	用水路	現状 7ha	(4)
白石野中井出	中央町白石野	不明	用水路		(4)
白石野下井出	中央町白石野	不明	用水路		(4)
木早川内用水	中央町木早川	不明	用水路	現状 0.5ha 貫井出あり	(4)
佐俣用水	中央町佐俣	1683 年	磨崖碑文	現状 7ha 当初 6 町余 文化 12 ~ 文政 2 年まで内田太右衛門手入れ	(4)
小岩野用水	中央町小岩野	1838 年	用水竣工板碑	現状 3ha 当初 3 町 5 反	(4)
岩野用水懸井出	中央町岩野	1846 年	井出	岩野用水取水の川水増のための井出	(4)
小簀用水	中央町小簀	1819 年	町在	現状 5ha 当初 4 町 5 反 堤懸 290 間、浦山・前田両堤掛り	(4)
白石野棚田	中央町白石野	(2)	棚田	周囲が開放的な小さな棚田	現地調査
板碑	白石野阿弥陀堂境内	1515 年	板碑		石は語る
阿弥陀三尊板碑	白石野阿弥陀堂境内	(1)	板碑		石は語る
長野加賀守逆修板碑	白石野阿弥陀堂境内	1562 年	板碑		石は語る
墓石(真如堂)	中央町白石野	1726 年	墓石		石は語る

境内)					
板碑(真如堂境内)	中央町白石野	(1)	板碑		石は語る
左俣用水開削磨崖碑文	中央町佐俣	1832 年	石碑	太八・利八が用水を手がけた	石は語る
津留川地区					
早楠井手	砥用町早楠	1689 年	上井手大改修記念碑	現状 30ha 延長約 4 km。二和田・安部・上土喰の一部に給水。	砥用町用水路一覧
安部・早楠景観	砥用町安部(早楠)		景観	盆地から見下ろす景観がよい	現地調査
土喰	砥用町土喰		景観	盆地から見下ろす景観がよい	現地調査
小夏橋	砥用町大字安部	不明	石造アーチ	全長 4.3m 幅 1.8m 高さ 1m 建造当時は砥用町仁和田にあったが、道路改良工事で現在地へ移設	現地調査
早楠神社	砥用町早楠	(1)	寺社		神社誌
光岸寺	砥用町清水	(1)	寺院		近世社寺
善通寺	砥用町	1862 年	寺院		近世社寺
早楠城	砥用町早楠	(1)	城跡		
椿用水	砥用町椿	不明	用水路		砥用町用水路一覧
棚田の地区					
中岳橋	砥用町大字甲佐平字中岳	不明	石造アーチ	全長 2.50m 幅 2.75m 高さ 1.60m コンクリートで拡張	(3)
桑野橋	砥用町桑野	不明	石造アーチ		(3)
小崎橋	大字川越小崎	不明	石造アーチ	全長 3.50m 幅 2.00m 高さ 3.50m コンクリートで拡張	(3)
山崎神社	砥用町山崎	(1)	寺社		近世社寺
小崎棚田	砥用町小崎	室町時代	棚田	2 種類の棚田が広がる	現地調査
下福良棚田	砥用町下福良	(2)	棚田	非常に開放的な棚田	現地調査
白石野棚田	中央町白石野	(2)	棚田	周囲が開放的な小さな棚田	現地調査

(注) 図中番号(1): 江戸時代か?(2): 室町時代か?(3): 美里町石橋一覧(4): 中央町用水路一覧

(1) 釈迦院川を中心とする地区

図-3 は、釈迦院川地区の位置関係や文化遺産の特徴をまとめて示す。この地区は用水路が開削されて、田畑が開墾されてきたが、現在でも数種類の用水路が活用されている。その中で岩野用水¹³⁾(写真-7,8)という農業用水路は技術的にも火薬を使って造られており、珍しい手法として価値がある貴重なものである。また、石橋も数多く水路のそばに造られ、今も活用されている。二俣二橋は河川が合流する地点に石橋が2橋あることから観光客が多く石工にも注目されている歴史的な石橋である(写真-9)。石橋のそばに石碑がある場合が多く、碑文から歴史を知る手がかりとなっている。釈迦院川の上流を北に行くと江戸後期から明治期に作られた寺社や寺院があり、昔ながらの民家や商店なども多く見られ、30以上の歴史的建造物がある。ここの地区は文化遺産と人が共生した歴史的な町並みの一角である。最下流を西に行くと小規模の棚田があり、十分ではないが維持管理されている(写真-10)。しかし、



写真 7 岩野用水 1

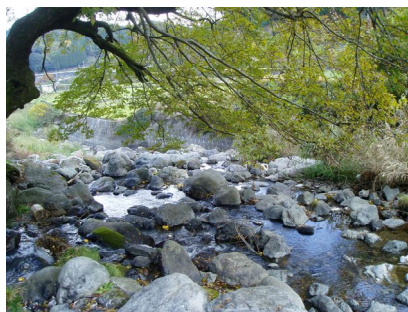


写真 8 岩野用水 2



写真-9 二俣の石橋



写真-10 白石野の棚田

水路と石橋橋がコンクリートで埋められるという文化遺産を軽視した改修が行われおり、全体を通して、歴史にも目を向けた整備・改修が必要とされる。

岩野用水について： 160 年前に建設された岩野用水は、現在も農業用水路として機能し、集落と農地は釈迦院川の渓谷の中腹に位置しているため、岩野用水が開削されるまでは稲作は一部の沢水を利用できる地区以外は行うことができなかったと考えられる。取水口は釈迦院川との合流点の白石野川側に堰提を設けて水位を上げ、白石野川の流量が不足するため、補う意味で釈迦院川の上流部より別の水路を掘削して白石野川の取水口の上流側左岸に導水している。水路としてだけでなく砂防という意味も有していたとするなら、これは全国的に見ても貴重な文化遺産として見なすことができる。歴史的に見ても、岩野用水は旧中央町を代表する用水路である。



図-3 釈迦院川を中心とする地区の位置(1 : 21000)

(2) 津留川を中心とする地区

図-4 は津留川を中心とする地区の位置関係を示したもので、昔ながらの風景や自然と民家の共生する空間が主体となっている。この地区町並みのそばや国道沿いあるいは用水路沿いに多くの碑文が残されており、国道沿いには石橋も多く架設されている。上流部分は盆地からの景色がよく休憩場所も確保されている。水路の横には民家や昔ながらの蔵もあり昔ながらの空間がある。津留川から東側に進むと石橋の水路橋である雄亀滝橋があり、水路は小眼鏡橋(石橋を通して安部・土喰まで続いており、非常に規模が大きく町の用水路として現在も管理・活用されている。水路横の道路も同様に雄亀滝橋から土喰まで続き、維持管理用としても使用され、非常に長い道なので遊歩道としても活用できる(写真-11)。室町時代に口ノ原を治めていた人物が造らせた石碑が今でも残っている(写真-12)。歴史的に貴重な石碑なので、碑文の保存も含めて文化遺産の再発見に活用したい。



写真-11 雄亀滝橋の水路と維持管理用道路



写真-12 口ノ原の石碑



図-4 津留川を中心とする地区の位置 (1:21000)

(3) 棚田を中心とする地区(小崎・白石野・下福良)

美里町の棚田は北に位置する小崎、東西に位置する下福良と白石野の計3箇所が主なものである(図-1 参照)。図-5 は小崎地区の棚田の様子を示したものであるが、小崎の棚田の特徴は開放的な棚田と閉鎖的な棚田に分けることができる。開放的な棚田には看板も設置され、小高い丘の頂上には当時の様子を記す石碑がある。大小数多くの棚田と、きれいに整備された石垣とで構成され、見事な広い空間を作り出しており、文化的景観として優れている。一方、閉鎖的な棚田は周囲を林に囲まれている部分も多く、開放的な棚田に比べると規模は小さい。しかし、これらの棚田は立派に手入れされて利用されており、歴史的かつ景観的にも価値も高く、魅力的である。また、石垣は民家の土台にも使われており人と自然と融合した空間ができている(写真-13)。

過去の石碑調査によれば小崎地区の碑文の情報は掲載されてなく、また、石碑の文字は消えかかっている現状を考えると一刻も早く調査が必要と思われる。石碑の文字は一般の人には何が書かれているかは分からず、重要な情報を保持していることも多いようである。今までは土木遺産、建築物あるいは石碑等については、研究分野ごとに調査がされてきたが、野外博物館化するには、すべての情報を収集し、まとめて評価・活用することが重要なポイントと考えられる。

白石野の棚田(写真-10)については既に述べたが、棚田の周囲が道路に囲まれており見通しはよい。しかし、小崎地区と比べると全体的にスケールが小さく、手入れの状況や石垣の整備状況も少し見劣りする棚田である。棚田全般の保存状態はよく、昔ながらの文化的景観として十分価値のある空間である。

写真-14 は下福良の棚田を示すが、非常に開放的な地域で用水路もあり文化財的としても貴重である。棚田は非常に広く、周囲には民家や林も見られないような広大かつ開放的な風景が続いている。ここは文化財の多い空間から少し外れているが、景観値としても優れた棚田として、整備・改修が求められる。



図-5 小崎地区の棚田の位置(1:21000)



写真-13 民家に使われる石垣



写真-14 下福良の棚田

(4) 三地区の共通点と問題点

三地区に共通するのは自然と人が共生した空間の中に古いに町並みと昔ながらの用水路や棚田が存在するのが美里町の特徴である。用水路は 300 年以上前から建設・利用され、棚田は室町時代から活用されている貴重な文化遺産である。町中に張り巡らされた用水路は美里町全体を覆っており、棚田や見事な景観地域が多数存在している。しかしながら、地元住民にとっては用水路は生活の一部であり、あって当たり前のものであるから素晴らしい文化遺産という意識は少ない。また、これらの文化遺産を訪問するためのアクセスについては、各地区を繋ぐようには計画されておらず、大きな道路から一步入ると幅が小さな道路が巡らされている状況で、非常に分かりにくいようである。小崎地区の棚田は道の途中に案内の看板が立っているが、分かりにくい場所にあり、アクセスの点からも問題がある。文化遺産に着目して整備・改修を行うことで、より魅力的で親しみやすい空間が生まれ、まちづくりに十分活用できると思われるが、そこへ至るアクセスの整備・改修が必要となる。

5. 野外博物館を利用したまちづくりの事例

美里町の野外博物館化によるまちづくり案については、現地調査や資料収集に時間を取られ、十分検討するまでには至らなかった。そこで、このようなまちづくりをした事例を調査した結果、太宰府市の「市全域をまるごと博物館」とする方策が参考になることがわかった。これは太宰府市が策定した「太宰府市文化財保存活用計画」¹⁴⁾を基本としている。「まるごと博物館」は有形・無形のものに問わずに文化遺産として対象としており、その目的や方法は以下ようである。

太宰府市のまるごと博物館：

目的：太宰府市は古代から現代まで幾重にも重なる歴史が脈々と息づいている。そこで太宰府市はこの市全域を「まるごと博物館」と見なし、住む人・訪れる人にとって魅力あるまちづくりを目指す。九州で唯一の国立博物館が大宰府に設置される背景として、市内に価値を持つ歴史・文化的遺産が残されていることが挙げられる。それらの遺産はあるがままで素晴らしい価値を持つものだが、価値を再発見・再評価することを通して、太宰府市へのより深い理解を促し、自らが暮らす地域への誇りと愛情を育成することが可能になる。そのために、太宰府市は「太宰府市文化財保存活用計画」を策定した。

対象：文化財の他にも町中に散在する祠や石碑、巨木や老木、風景に溶け込む古い民家などもまちづくりの資源。

方法・内容：

- ・まちづくりには市民、事業者、行政が連携・協働して取り組む姿勢が大切。自主的な活動を行っている市民グループ・団体や学校との連携を促進し、より多様な事業活動を行い、持続的・発展的なまちづくりを推進する。
- ・「太宰府市まるごと博物館」は、九州国立博物館及びその周辺エリアをコアエリアとする市全域において歴史・文化を五感で漢字・味わうことの出来る一つの「屋根のない博物館」である(図-6)。
- ・太宰府の「光」、悠久の歴史である「時」がもたらした様々な有形・無形の歴史・文化的遺産や自然環境、歴史的建造物や景観をはじめ、産業や人々の暮らし等の地域資源の再発見・再評価を通して太宰府市への愛情と誇りを育成する。それは市民、事業者、行政が一体となって取り組むまちづくりそのものである。
- ・「太宰府市まるごと博物館」は、太宰府市の価値を再確認するとともに、地域の「光」を守り、磨き、新たな「光」を放っていくことにより、太宰府市の未来を創り出していく博物館である。こうして街づくりにまるごと博物館を活用していくのが太宰府市の計画である。市全域が「まるごと博物館」であり、歴史が残したものを守り、未来を創る博物館を目指し、市民と来訪者にとって魅力的なまちづくりをすることが太宰府市の目標。

美里町では、まず調査で有形のものを確認したため、まず有形のものをを用いての野外博物館化を目指す。本調査で得られた文化遺産について地図を用いたデータベースを作り、地区別にデータをまとめる方法や具体的なまちづくりを目指すことにする。特に、野外博物館の構成内容について、地区別に参考にして、地区別に分かりやすい画像や写真、地区の説明や各地区へのつながりなどを加えた独自の地図データベースを作成する。これらを用いてアクセスや詳細の交通ネットワークについ



図-7 太宰府市の地区別イメージ図例

て分かりやすく提示する必要がある。

6. おわりに

本研究では、美里町における土木遺産等を用いた野外博物館化を目指し、現地調査を主としてを行った。以下に得られた結論をあげる。

- (1) 現状把握のための調査と文献による資料収集から、美里町の文化遺産の各リストを作成した。
- (2) 美里町は、素晴らしい景観地や歴史的な用水路や棚田が多数存在している文化遺産の豊富な町であることがわかったが、十分な保存・活用策が取られていないものも多かった。
- (3) 土木遺産、建築物あるいは石碑等については、研究分野ごとに調査がされてきたが、野外博物館化するには、すべての情報を収集しまとめて評価・活用することが重要なポイントとなる。

今後は以下の課題の解決が急がれる。

- (1) 文化遺産のリストから詳細な現地調査を行い、地域別に文化遺産のリストを地図上に写真付きで載せるデータベースの作成。
- (2) 野外博物館化したまちづくり案を早急に作成して町や住民へ提示し、町が所有する文化遺産の素晴らしさの認識してもらい、活用策と一緒に検討する。

謝辞： 本研究では、卒業研究として現地調査や研究のまともに協力をしていただいた土木環境システム工学科4年生の尾中俊平君に記して感謝致します。

参考文献

- 1) 熊本県教育委員会：熊本県の近代化遺産、近代化遺産総合調査報告書，1999.
- 2) 熊本県教育委員会：熊本県近世社寺調査報告書，1986.
- 3) (社)日本建築学会：景観法と景観まちづくり，学芸出版社，pp.36-139，2005.
- 4) 熊本大学文学部日本史跡研究室：下益城郡美里町中央町地区金石文遺物調査報告書 -石は語る，pp.8-45，2003.
- 5) 熊本大学文学部日本史跡研究室：下益城郡美里町中央町地区金石文遺物調査報告書 -石は語る，pp.4-22，2005.
- 6) 中央町用水路一覧，美里町資料
- 7) 砥用町用水路一覧，美里町資料
- 8) 森永功：肥後藩手永・惣庄屋一覧，pp.30-34.
- 9) 伊東龍一：美里町歴史的建造物一覧(寺社) 2005.
- 10) 上米良利晴：熊本県神社誌，青潮社，1981.
- 11) 明治神社誌料編纂所：明示神社誌料編纂所，講談社，1912.
- 12) 堀由蔵：大日本寺院総覧，名著刊行会，1966.
- 13) 幸田亮一：産業遺産としての岩野用水の意義
- 14) 太宰府市：大宰府市まるごと博物館基本計画，pp.1-16，2002.

15) 西村幸夫他：都市を保全する，鹿島出版社，2003.